

私を生きる

——セクシュアル・マイノリティを描く2つの映画

江島香希 (映画監督)

アジア千波万波ノミネート作品『トランスジェンダーつれづれ』と『咲きこぼれる夏』は共にセクシュアル・マイノリティ（一方は若年の Male to Female トランスジェンダー、もう一方は HIV/AIDS 陽性男性同性愛者）を描いた作品だ。2013 年は、4 月にフランスで同性婚が認められたのを皮切りに、世界的にセクシュアル・マイノリティの法的整備に動きがあった。その一方、6 月にはロシアで反同性愛法が可決され、8 月には NY でトランスジェンダー女性 Islan Nettles さんがヘイトクライムに遭い殺害されるという事件もあった。依然、トランスフォビア／ホモフォビア／ミソジニー（ミサンドリーもそれ以外もあるだろうが）の問題は続いている。インドと韓国の場合はどうなのか。私が今回この両作品を見て感じた印象は、男女二分のセクシュアリティに立ち向かう人々の物語というよりは、今も昔も変わらない一人の人間の思い悩む姿だった。

『トランスジェンダーつれづれ』には、主人公の一人であるブバイが高校の修了試験を受けに行くシーンがある。そこでブバイは同級生に囃し立てられる。「こいつを脱がせてオッパイ撮れば?」「これ何の映画?」「ブバイとファック」。同級生はブバイのどのような立ち振る舞いに批判を浴びせているのか。それはブバイが他の高校に通う同級生に比べて男らしさの規範からずれていることだ。髭を生やさず、髪を伸ばし、身をこざれいにする。監督のカメラが同伴しているためか、ブバイは気丈に振る舞っている。しかし、罵りの言葉を投げかけられた心情は、うつむいた顔がすべて語っている。一体、ブバイはどう生活に折り合いをつけて生きているのか。同じような境遇をもったトランス

ジェンダーと問題を共有しているのか。またそこでお互いの不幸をぶつけ傷つけ合ってしまうのか。考えると切りはないが、「これが私の映画デビュー作ね」と自信をもって語るブバイに、私はほっと息をついた。

『咲きこぼれる夏』ではハンギがドゥヨルと同棲生活を始める。その一室で HIV/AIDS の薬を探すハンギにドゥヨルはこう呟く。「ゲイだろうがバイだろうが何でもいい。そんなことと関係なくハンギが好きだ」。売春をしていた 21 歳の時、ドゥヨルは HIV/AIDS に感染した。以前は異性愛者とも関係をもっていたが、病気のせいで「人を愛せなくなった」とハンギに伝える。ハンギは「病気の人間は差別される、それ自体が間違っている」と答える。共に同性愛者人権連帯に参加するハンギとドゥヨルだが、どこか二人の HIV/AIDS 観は異なっている。ハンギは友人にカミングアウトした際、抱きしめ慰められたのに対し、ドゥヨルは汚らしい病気、と友人から拒絶された。似ているようで似ていない二人の距離は少しずつ広がっていく。ただ人を愛したい、それだけなのになぜ愛せないのか。そのジレンマが心を揺する。

ブバイもドゥヨルも差別、偏見と闘いながら幸せを手にしようとする。しかし、何がそれを困難なものにしているのだろうか。私たちはトランスジェンダー、また HIV/AIDS という言葉に対し、どれだけの想像力を持っているのだろうか。無知は罪、とまでは言いたくないが、目の前に当事者が現れたときの状況を考えてほしい。一人でも多くの人々が幸せになることを願いつつ、私も両監督と同じ思いで映画を撮り続けたい。

■上映

『トランスジェンダーつれづれ』【NAC】 10/11 16:40- [F3] | 10/13 20:00- [F5]

『咲きこぼれる夏』【NAC】 10/11 18:40- [F3] | 10/13 17:00- [F5]